

岩下壮一師とアウグステイヌス

荻野弘之

大正末年から戦前・戦時中にかけて活躍したカトリック司祭・岩下壮一（一八八九—一九四〇）は、聖フィリップポ寮や神山復生病院など数多くの社会・教育事業を推進したが、他方、言論人・宣教師としての立場にあつては、とりわけアウグステイヌスの愛読者、紹介者でもあつた。代表作『信仰の遺産』（二九四一年）を見れば、他の思想家に較べてアウグステイヌスの引用は突出している。<sup>1</sup> また *Confessions* を『讚美録』と訳したことも知られていよう。<sup>2</sup> 無論この訳語は「告白」に善悪二種類を認める『詩篇講解』（1913）の記述を参照していることから明らかなように、単なる岩下個人の趣味や直観ではなく、文献的な典拠をふまえての見識だつた（『聖アウグスチヌス「神の國」』<sup>3</sup>）。とはいへ「懺悔録」を斥けたのは、おそらく同名のルソーの自伝を連想させたからだろう。<sup>4</sup> スキャンダラスであるにもかかわらず、否むしろそれゆえにこそなされる自己顕示的な告白の行為は、まさしく近代的な自我意識の極致であり、

岩下が嫌った個人主義的な信仰のあり方に通底するものがある。

たしかにアウグステイヌスには、デカルトに通じる近代性を宿すことを岩下は認めている。<sup>5</sup> それでもなお彼はアウグステイヌスにおいて「近世哲学の最も透徹せる批判を学んだ」<sup>6</sup>のであった。もつとも、こうした古代・中世にも近代にも通じる双極性こそが、この教父をして新・旧両教会からひとしく尊崇されてきた最大の理由なのである。

とはいえ岩下の読解が「トミズムの（最大の）源泉としてのアウグステイヌス」という新トマス主義の称揚する図式に簡単には収容しきれないことも事実である。パリでのマリタンの講義への不満を吐露しているように、この点では自身の後継者とも言うべき吉満義彦とは微妙に違っている。師の没後、吉満（当時は上智大学教授）はカトリックを代表する立場で、京都学派、『文学界』同人、日本浪漫派を糾合した座談会「近代の超克」（昭和一七年七月）に加わり、「近代超克の神学的根拠」を寄稿して徹底した近代批判とキリスト教的中世への憧憬を率直に披歴しているが、その中にも「聖アウグスチヌスより聖トマスへの道において」中世世界が「形而上学的ロゴスの価値秩序を把持して来た」として引用されていた。<sup>7</sup>

こうした新トマス主義が一段落した後——教父研究者の間では周知の事実だが——クルセルやマルーに代表される六〇年代のフランスにおける研究は、同時代の複数のテクストの並行参照、修辞や表現の細部への着目などの文献批評を徹底した手法によって、トミズムの先駆をなす「体系的神学者」としてのアウグステイヌスを脱構築しようとした一連の試みであった。それは「ロザリオを手にする聖モニカ」という図像<sup>8</sup>が明らかに時代錯誤的であるように、中世的に着色された教義学者像を脱色して、古代末期のミラノや帝政下の北アフリカ教会といった固有の時代に生きた教父の姿を取り戻すこと——つまりアウグステイヌス研究の

進展とは、神学に対する歴史・文学的なアプローチの優位という方法的転換を意味してもいたのである。そして現在の教父研究の状況は、依然としてこうした延長線上にあると思う。

岩下が「忘れられた思想家」に数えられる理由は、日本におけるカトリック神学の耕地面積の狭さや訴求力、その学問的水準の上昇もさることながら、第二ヴァティカン公会議と相前後してエキュメニズムが進展したために、岩下のうちにあるプロテスタントイイズムへの厳しい批判が、カトリックの陣営にも「お蔵入り」を強いたこと、そして彼の高踏的なスタイルが災いしたとも言えよう。

しかし岩下のアウグスティヌスへの取り組みは、単にアカデミックな研究に尽きるものではなく、教会の直面する実践的課題と直結する次元を持っていた。半澤孝麿によれば、それは戦時色が強まる中での「校生徒の神社強制参拝問題」と「徴兵忌避問題」絶対非戦論<sup>(9)</sup>への対応など、次第に深刻さの度を増していく「国家と教会」の関係であった。岩下がアウグスティヌスを引用する際、おそらくは同時代の様々な政治的問題に直面せざるをえない教会指導者同士の、凶らざる連帯感のような気持を抱いていたに違いない。そして日米開戦の前年に、興亜院の依頼で満州北支に宣撫工作のために派遣された際に健康を害したことが、直接の——限りなく「殉教」に近い——死因であった。

岩下の著作を繙く者は今日でも多くないし、彼のアウグスティヌス論が、どれほど現在の「研究」に寄与するのは正直いって分からない。それでも、格調の高さとともに多くの箇所でお戸惑いを禁じえない文章の行間に思いを潜めるとき、「教父を研究するとは一体何なのか？」という、読者あるいは研究者としての最も手前にあるはずの問題に、改めて思いをいたさずにはいられないのである。

(おぎの・ひろゆき 上智大学教授)

註

- (1) 岩下壮一『信仰の遺産』（岩波文庫、二〇一五年）山本芳久作成の索引参照。
- (2) 山田晶訳『告白Ⅲ』中公文庫、二〇一四年、二九七頁。
- (3) 「岩波大思想文庫」（昭和一〇年）の一冊として刊行され、後に『中世哲學思想史研究』（吉満義彦編、岩波書店、一九四二年、一九二頁）に再録。その構想は卒業論文（仏文、明治四五年）に遡る。
- (4) ルソー『懺悔録』（生田長江・大杉栄訳、新潮社、昭和四年）。こちらも戦後になると「告白」という標題（桑原武夫、井上充一郎）が定着する。
- (5) 「聖アウグスチヌスの真理探求論」『中世哲學思想史研究』三四〇頁。
- (6) 「カトリック的宗教態度」『信仰の遺産』岩波文庫、八四頁。
- (7) 『近代の超克』富山房百科文庫、一九七九年、五九一―八二頁。
- (8) O. Wimmer, *Kennzeichen und Attribute der Heiligen*, Innsbruck, 2000 『図説 聖人事典』藤代幸一訳、八坂書房、二五七頁。
- (9) 半澤孝磨「岩下壮一小論」『近代日本のカトリシズム』みず書房、一九九三年、二八〇―二八二頁。
- (10) 拙稿「キリスト教の正戦論—アウグスティヌスの聖書解釈と自然法」山内進編『正しい戦争』という思想』勁草書房、二〇〇六年、一一一―一四四頁。